序　文

頭塔は東大寺の南方、新薬師寺の西方に位置し、土と石で築いた日本でも希有の仏塔遺跡であり、樹木が鬱蒼と茂った方形土壇の姿を見せ、斜面のあちこちには奈良時代を代表する優美な石仏が点在し、仏像の研究者や愛好家の間で隠れた名所として知られていた。「頭塔」の由来は、奈良時代の政界で活躍した僧・玄昉の首塚であるとする伝説にちなんだものだが、じっさいは神護景雲元年に東大寺の僧・実忠が建立した「土塔」にあたる。奈良国立文化財研究所は、頭塔についても早くから関心を持ち、1960年に全体の地形図を作成し、1978年には小規模ながら発掘調査を行った。

1922年の国史跡指定以来、頭塔の管理にあたってきた奈良県教育委員会は、遺跡を復原整備して広く一般に公開することを計画した。復原整備に際して、奈良県教育委員会は文化庁の指導のもと「史跡頭塔環境整備委員会」を発足させ、最初に発掘して頭塔の全容を明らかにすることとし、発掘調査と復原の検討を当研究所平城宮跡発掘調査部に委託した。発掘調査は1987年に開始し、1991年からは発掘調査と復原整備を並行して行い、2000年度に全事業が完了し、本書は発掘調査に関する報告である。

本書には発掘調査の成果のみならず、史料からみた創建時期の再検討・造塔の構想や事情・仏塔としての系譜などに関する考察を可能な限り盛り込んでおり、奈良時代の仏教建造物・石刻芸術を辿るうえで不可欠の資料を提供できたものと自負している。

本書が今後の歴史研究に大きく寄与することを心から願うとともに、本書の刊行が契機となって、頭塔に関心を持つ人が少しでも増え、その重要性が広く認識されることを祈る次第である。

おわりに、本書の刊行にあたって多大のご協力をいただいた文化庁・奈良県教育委員会・史跡頭塔環境整備委員会・史跡頭塔保存顕彰会の方々に深く感謝申し上げる。

2000年10月

奈良国立文化財研究所
所長　町田　章